

●「初心忘るべからず」という言葉があります。この言葉は「物事の初めに抱いた素晴らしい志や理想を忘れてはならない」という意味でよく用いられていますが、この言葉を残した能の大家、世阿弥の言う「初心」は、それとは少し異なり「初心者」という意味での初心のことを指し、未熟な時の葛藤や苦悩して得た芸風、また感謝の心などを忘れないことが芸や人間の成熟につながっていくのだと教えているのです。

●本日の聖書はガリラヤ湖で漁師をしていたペトロがイエス様と出会い、弟子としての歩みを始めたことを伝える、いわばペトロの「初心」を描いた箇所です。ペトロはイエス様の言葉に従って渋々船を漕ぎ出して漁をしたその時に、思わぬ大漁という神の恵みを経験し、同時に自らの罪深さを知らされます。そしてそんなペトロに「恐れるな」と声をかけ、宣教へと招かれたイエス様の姿が描かれています。ルカがあえてこのような話を福音書に加えたのは、後に初代教会の指導者となったペトロにも、常に立ち返る「初心」があったのだと伝えたかったのでは無いでしょうか。そして、罪深い存在にもかかわらず、そのまま招いてくださるイエス様は常に私たちと共におられ、どんな困難に遭遇しても、主に従い歩み出す時に驚く恵みが備えられるのだという励ましがここにあるのです。

●世阿弥は「是非の初心、時々の初心、老後の初心忘るべからず」と語っています。つまり若い時、人生半ば、そして老後のそれぞれの時期に行き詰まりや挫折があるが、その時々の初心を大切にし、さらに芸の深みへと向かっていく事を勧めているのです。

今日の箇所でイエス様が言われた「沖に漕ぎ出しなさい」という言葉は「深みに向かって」という意味のギリシャ語がつかわれています。これは私たちキリスト者が常に困難と行き詰まりの中で主の言葉に従い、この世の深みへ、人生の深みへと進んでいく存在であることを示しているのです。

●世の中は未だ収束の見えないコロナ禍や急速に進む高齢化、ITやソーシャルネットワークが不可欠な時代を迎えています。そのような時代にあって、主は常に「恐れるな」と声をかけて、課題の多いこの世の深みへ、またそれぞれの人生の深みへと私たちを導いておられます。主を信じて歩むところにこそ驚くような恵みがあるという「初心」を覚えつつ、共に歩みを進めて参りましょう。